

かごしまの昔話

むかしばなし

もの言う亀



昔々、奄美大島のある村に兄と弟がおりました。兄は早くに嫁をもらって分家し、たいそう金持ちでした。しかし、親の暮らしを助けようとはしなかつたので、弟が親の面倒をみていました。弟は一生懸命働いていましたが、いつも貧乏でした。

ある年の師走、正月がくるというのに、もちをつくこともできず、年取り料理の豚骨もないというありさまでした。弟は「何もない正月だね。貝でも採ってくるよ」と浜に行きました。浜を歩いて貝を探していると、「親子んヒイヒイ」と言う声がします。それは小さい亀でした。弟がそれを持って帰り、親に見せると、亀はすぐに、「親子んヒイヒイ」と言いました。親たちが「泣いておる」と哀れがったので、ここには長くおけないと思ひ、兄の家に行きました。



「もの言う亀を拾ってきたよ」と言うと、「もの言う亀？ 本当かよ。本当ならまず一升の金をやるぞ」と兄が言ったので、弟は亀を持ってきました。その亀が「親子んヒイヒイ」と言いました。兄は驚き、まず一升の金と竹ザル一杯の米をくれました。

元日の朝、兄はその亀を借りていきました。兄は隣り村に行き、その金持ちと賭けをしたのです。亀がものを言ったら、兄の勝ちで隣り村の金持ちの財産の半分をもらい、亀が何も言わなかつたら、向こうの勝ちで兄の財産を半分やるというものでした。

(原話『久永ナオマツ 姪の昔話』)

文/有馬英子 絵/二石綱夫